

海外転校の勧め

2001年5月5日 明治学院大学経済学部教授 高島 均

日本の大学は、何処が良くないのか

私がまだ大学生であった時にも、高等教育のあり方が、大きな話題となっていました。そもそも、60年代後半から徐々に、そして、70年代に入って急速に全国に広がっていった、学生達の社会に対する異議申し立ては、フランスにおいても日本においても、大学のあり方を問うものとして始まったものです。

社会は、恒常的に、高等教育のあり方に大きな関心を払ってきましたが、その関心の大きさは、時の流れの中で強弱があり、今日の高等教育に関する関心の大きさは、今までの中で、もっとも大きなものといえるかもしれません。

若い時から、日本社会のあり方に関して関心を持っていたものとして、同時に、高等教育の現場に大学教授として身を置いているものとして、以前から、私なりの考えを、学内においても、社会においても、明らかにする事により、学生として日本の高等教育機関において学んでいる青年達に、少なくとも私が経験したそれよりも豊かな学生生活を保証し、また、日本の未来を、昨日よりも今日よりも輝かしいものとするために力を尽くしたいと考えてきました。しかし、日本社会の教育をめぐる変化は、極めて早く、しかも、私の観点からすれば、益々好ましくない方へと転げ落ちるようにして進んでいます。私が、ここでいっている「日本社会の教育をめぐる変化」とは、世間で言われているような、『学生の学力低下』自体ではなく、行政と高等教育機関の『教育改革』の中身であり、また、いわゆる『識者』や政治家の薄っぺらな『見識』です。

明治学院大学における『教育改革』も含め、高等教育をめぐる議論や制度変更のめまぐるしい変化の中で、私は、もはや、「行政と高等教育機関の『教育改革』」の何処此処に問題があるのか、説明する気力さえ失せてしまいました。高等教育改革に関する私の意見を整理しているうちに、状況は益々悪化し、しかも、悪化の原因は、行政と高等教育機関による『改革』とマスコミの宣伝に乗った『識者』や政治家の『見識』である以上、何時までたっても、私の見解を整理して公表することが出来ません。次から次へと、主張しなければならぬ事・反論しなければならぬ事が出て来るのですから。

ただ、一つ言わせてもらえば、日本における高等教育の最大の問題点は、高等教育の中身自体にあるのではなく、日本の高等教育が置かれている社会の特性、すなわち、努力の結果を一切評価しようとせず、形式的な平等性に過度に固執する点に在るのです。学生時代にどれだけ一所懸命勉強したか、そして、どれだけ成果をあげたかが、就職する時に、大学院に進学しようとする時に、一切評価されない社会において、一体、誰が、学生時代に、まともに勉強しようと思うのでしょうか。

鳩山邦夫氏が文部大臣になって『偏差値追放』を叫んだ時から、中等教育は、『個々の生徒の個性を尊重する教育』という名の、個々の生徒の能力と才能を押しつぶす教育へと変わり失せ、中学校高等学校は、調査書を武器として振るう教師という名の獄

吏が支配する監獄へと変わってしまいました。高等教育においても、『大学間の序列化を防ぐ』というスローガンのもと、表面上はただ、『大学卒』という形式的条件のもとで画一的に取り扱われてしまっています。もちろん、大学間に格差があり、学生間に格差があるのは自明の事で、従って、企業は、採用人事において、良し悪しは別として、とにかく客観性を持っている唯一の基準、入試における大学の偏差値を利用し続けて来ました。その結果、大学における学生の努力は一切評価されません。努力の余地があるところには、当然に結果に対する序列が生じます。序列は、努力に対する社会による評価なのです。だからこそ、明日のより高い評価を求めて、大学は教育サービスと研究に励み、学生は勉学に励むのです。序列化自体が悪なのではなく、序列化が闇の中で行われ、従って、その序列が固定されていて、流動性のないことが問題なのです。

現在進行中の教育改革の検討は、相も変わらず、序列化をタブーとし、努力を一切評価せず、社会による評価を拒否し、画一的な人材を、『個々人の個性と能力を尊重する』という極めて矛盾したスローガンによって育成していくものです。かつて、私は、学生諸君に、この日本社会を、手を携えて改革に乗り出してくれる、勇気と気概を求めました。しかし、今、私は、勇気と気概を持つ学生達に、日本を捨て、個々人の個性と能力を真の意味で尊重し、努力を正當に評価してくれる外国の社会に、いち早く脱出する事を勧めます。

海外脱出の方法

海外転校

革命という社会変革手段は、日本社会では歴史的にあまり採用されなかった手段です。しかし人々は、惨めな暮らしにただ甘んじていただけではありません。耐え難い状況の中で、日本社会が歴史的に選択してきた方法は、逃散です。今、私は、君達に、逃散を勧めます。前途有望な若者が、泥舟に留まり、沈み行く社会とともに海の藻屑と消える理由は一つもありません。それだけの価値が、日本社会にないのです。何故ならば、日本は、もはや、滅びる事によってしか救われないからです。

今日、多くの大学が、国際交流を一つの謳い文句として学生を獲得しようとしています。しかし、その国際交流の実態は、3週間程度の語学研修や、せいぜい1年間の留学である。こうした国際交流事業に参加して帰国した学生達の多くは、『アメリカでは、先生は毎週宿題を出し、学生達は夜遅くまで図書館で勉強をし、授業中は活発に発言している。とても素晴らしかった。』と言いますが、『日本に帰国してからのあなたの授業態度は、留学する前と変わりましたか?』という質問に対して、『いいえ。だって、一人だけ授業中で発言すると、浮いてしまいますから。』と答えます。

ところで、多くの大学が、国際交流として学生を海外の大学に送り出すのに熱心ですが、海外の大学で学生生活を送るには、『転校』という手段があることを教えようとしません。この点、明治学院大学も例外ではありません。他方、日本社会で育った学生達には、転校という手段があるということを思い付く事も出来ません。『転校』は、公立の小中学校でしか、しかも、親の転勤というやむに終えない事情の場合のみに認められる、極めて例外的なものであるというのが、一般的な日本人の受け留め方でしょう。

大学だって転校できる

外国の大学ならば

日本社会ならば、大学を変わろうと思えば、通いたい大学の入学試験を、改めて受けなければなりません。即ち、日本の大学には、『転校』という制度はないのです。しかし、アメリカでは、大学にも『転校』Transfer という制度があります。世界中、何処の国の大学生でも、アメリカの大学に転校の申請をすることができます。転校の申請 application の許可 admission は、英語の能力・在籍している大学での成績そして推薦状によって決定されます。(なお、推薦状は日本の常識では考えられないほど厳密で、しかも、その比重は高い。)

転校するとき、現在の専攻と応募する専攻が同じである必要もありません。例えば、経済学科の学生でも、舞台芸術の専攻を希望することができ、その際、日本で、舞台芸術関係の科目を履修していたかどうか関係ありません。経済学科で履修した科目で良い成績を上げていたならば、舞台芸術専攻の学生となった暁には、舞台芸術の勉強を一所懸命するだろうと推測されるのです。現在いる場において努力をし、その努力において目に見える結果を引き出せる学生ならば、別の場に移っても、同じように努力すると判断されるのです。ノーベル賞級のレベルはともかくとして、一般的に言えば、努力と結果は、かなりの程度相関しているのは事実ですから。

明治学院大学経済学科の学生にとって、アメリカの大学のどの学科に転校するにしても、明治学院大学で経済学を一所懸命勉強する以外の条件は、英語に堪能になる事だけです。

金銭的負担が大変では？

金銭的負担を考えて、躊躇している君へ。授業料や寄宿費、生活費はどうしたらよいのでしょうか。明治学院大学の国際交流計画として留学するのでも、ずいぶん経費がかかっています。でも、心配しないで大丈夫です。「大学の国際交流計画としての留学」だから経費がかかるのです。

アメリカの大学には、数々の奨学金の制度が整っています。日本の奨学金は、『貧しい家庭の子女』に、勉学の機会を与えるためのものです。従って、「自分の親」が『貧しい家庭』である事を証明する書類が必要となります。従って、日本では、『貧しい家庭』である事を書類操作によって立証できる自営業(医者、弁護士、農家など)を営んでいる家計の子供達が、奨学金を受け取る事になってしまっています。アメリカでは、奨学金をもらうのに、親は関係ありません。本人が問題です。本人が、奨学金をもらうに値する人物であれば、即ち、社会が負担した費用に見合うだけの貢献を将来期待できる場合に、奨学金が与えられます。具体的には、成績によって奨学金がもらえるかどうか決まります。従って、アメリカでは、奨学金をもらっていた事は履歴書にも記載するほど、社会的価値の高いことです。

成績さえ良ければ、授業料が免除されるばかりか、生活費まで支給されます。金銭的なことを心配する必要はありません。大事なのは、今、日本で、しっかり勉強する事です。それが、アメリカの大学へ転校するとき、正當に評価されます。

いざ、アメリカへ行こう! 留学ではなく、転校を!

日本社会は、努力を正当に評価する仕組みを持っていません。アメリカ社会は、努力を正当に評価します(もちろん、様々な問題を抱えていることは事実ですが)。アメリカ社会の原理は、公正 fairness なのです。『公平』に過度に拘る日本社会では、君たちは、決して公正に取り扱われません。君達の未来を、日本社会と言う名の泥舟の中に留め置き、犬死する事はありません。私は、努力を正当に評価する社会への脱出を目指す学生諸君に、最大限のアドバイスと応援をするつもりです。